

埋門

埋門は後から姫路城に作られた門である。大名池田輝政（1565–1613）が城郭を現在の規模にまで拡張してから約 20 年後の 1620 年代に作られた。元々、ここは切れ目のない石垣だったが、入り口を作るために穴があげられた。埋門は姫路に特有のものではない。一般的に小さく簡素な造りで、土塁などに開けられた門を埋門と呼ぶ。内門が発掘された後、城壁に囲まれた中庭と外門が追加された。他の城門の内門とは異なり、埋門には直上に見張り台はなかった。その代わりに、門のすぐ西側には 2 階建ての大きな見張り台と番所があり、城下町の南西角を守っていた。この櫓は、城の防御者に北と東の城門を見渡せるだけでなく、京都から本州の西の端まで続く西国街道を監視することができた。